互恵的学習環境を提供するための海外研修：その実践と考察

駒　形　千　夏

１．はじめに

長期休暇を利用した語学研修は以前より実施されており、それは大学附属等の語学学校の授業を受ける形態である。目標言語が使用される地域の語学学校には様々な言語文化的背景を持つ受講者が集まるため、目標言語文化を学ぶだけでなく多様な文化を持つ者と接触することができる。しかし一方で、目標言語を母語とする者と接触する機会は、語学学校の授業の枠組みの中だけではあまり期待できない。そこで、言語運用実践環境を学習者および目標言語母語話者との友好的関係に基づいて整備する試みを行った。本稿では、その取組が参加者に与える効果を考察し、互恵的学習環境提供の方策を探ってみたい。

２．考察対象

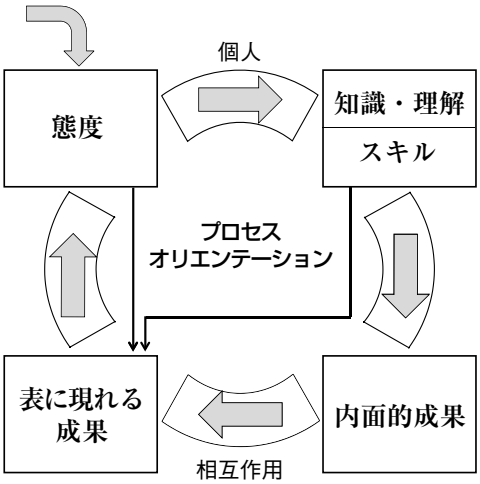
2012年２月から３月に行った海外研修の参加者10名を対象とする。参加者はすべて本学の学生であり、研修実施の告知に応じて集まった学生である。学部の分布は人文学部４名、教育学部１名、理学部１名、医学部２名、農学部２名である。また学年は１年次生９名、３年次生１名、と１年次生が大半を占める。参加者は全員が大学で目標言語を第２外国語として履修開始し、授業の枠組みの中で学習しているが、個人の履修形態によって履修時間は異なっている。総履修時間が67.5時間の参加者が４名、135時間の者が２名、180時間の者が３名、180時間を超える者が１名である。

３．考察方法

研修終了後に参加者より提出された報告書を、Deardorff（2006）（注１）のいう高等教育で身につけるべき異文化間能力とその構成要素モデルに基づいて分析し考察する。Deardorff は、アメリカにおける24の高等教育機関と23名の異文化間教育研究者へのアンケート調査に基づき、次のような「異文化間能力のプロセス・モデル」を提唱している（注２）。

このモデルでは、高等教育による異文化間能力の成果を得るために必要な「態度」の習得に始まり、「知識・理解」と「スキル」の獲得から「内面的成果」を経て「表に現れる成果」を達成し、さらにそれが「態度」を修正することで新たなサイクルが始まるという循環構造を示している。また「態度」や「知識・理解またスキル」の獲得が直接「外面的成果」をもたらす、異文化間能力習得の複雑さを表しているが、参照枠組みの転換という内面的成果を経ることなしでは表に現れる成果の実りも少ないと Deardorff は述べている（注３）。

Deardorff, 2006：異文化間能力のプロセス・モデル



このサイクルを形成する５つの要素には次のような構成要素が含まれている（注４）。

要求される態度：尊敬（他者の文化の尊重、文化的多様性）
開放性（異文化間的学びに対する、また他者の文化を持つ人々に対する開放性、判断の保留）
好奇心と探究心（曖昧さや不確かさの許容）
知識と理解：文化的気づき
文化に関する深い理解と知識（文脈、文化の役割と影響力、他者の世界観）
文化に特有な情報
社会言語学的気付き
スキル：　聴く、観察する、解釈する
分析する、評価する、関連づける
内面的成果：　適応性（異なるコミュニケーション・スタイルや行動への適応性、新しい文化環境への調整）
柔軟性（適切なコミュニケーション･スタイルや行動を選択して使う、認知的柔軟性）
比較文化的視点
共感
表に現れる成果：自らのゴールをある程度達成するために（自らの異文化間的知識・スキル・態度に基づいて）効果的かつ適切に行動し、コミュニケーションを図る

ここで「表に現れる成果」を達成するために重要と指摘される13の構成要素に基づき、研修参加者から提出された報告書の中に現れる記述を分類して次項で考察する。ただし、

「態度」の構成要素の中に「好奇心と探究心（曖昧さや不確かさの許容）」とあるが、曖昧さや不確かさを許容する寛容性は、好奇心や探究心とは別の、他者との対話の過程で何らかの衝突を経てそれを克服して獲得される態度であると考えられる。そこで「好奇心と探究心」から独立させて「寛容性（曖昧さや不確かさの許容）」という要素を追加する。

４．研修の概要

当研修は、日本での事前研修および海外現地研修の二部構成であった。事前研修は２月に90分のセッションを７回行い、研修先の大学から本学に留学中の学生２名をランゲージ・アシスタントとした目標言語表現実習に当てた。上述のように参加者の履修歴には個人差があるため、履修時間の少ない学生のハンデを補い、またより多く履修した学生には口頭表現技術のブラッシュアップの場となることを目的とした。

現地研修は３月に実施し、交流協定大学、近隣の高校、および現地の国際友好団体と連携し、参加者が現地の大学生・高校生と友好的に直接対話することによって目標言語の実践を行った。

交流協大学および高校との連携実践では日本語クラスに参加し、大学では授業の中でお互いに自己の文化をプレゼンテーションしたりクイズなどの形で紹介する取組みを行い、授業後に引き続き自由に語り合う場を設け、授業での内容を受けて議論を進めることでお互いをよく知り、互恵的関係作りを目的とした。また、研修で市内見学を行った際にも、先述の授業で知り合った多数の大学生に同行してもらい、友好を深めつつ言語実践を行った。高校では、現地での日本語学習を初めとした現代語学習環境について学んだ後、グループ学習形式で高校生が日本人学生のライフスタイルに関するインタビューに答えた。研修参加者にとっても現地の日本語学習者にとっても、お互いの文化に興味関心を抱く年齢の近い目標言語母語話者と直接対話する体験学習となった。

もうひとつ連携実践を行った民間国際交流団体は、日本語や日本文化に強い関心を持つ学生および社会人で構成され、それらを紹介し根付かせるための催しを積極的に開催し、また日本の民間団体とも会員を派遣し合うなど、啓蒙活動が盛んで熱意ある会員で構成されている。この団体との連携実践も友好的関係に基づく目標言語実践との位置づけは変わらないが、参加者にとっては年齢が近く親しみやすい相手というよりも経験を積んだ大人であるので、彼らから国際交流への信念や意欲を聞き出すことを目的とした。また、現地研修が参加者の怪我も病気もなく安全に修了することができたのは、当団体会員の手厚いサポートによるものである。

上述の交流協定大学には、本学より短期留学中の学生が２名在学している。これらの学生には当研修の補助として参加してもらった。

５．考察

このような事前研修・現地研修を体験した参加者に現地研修終了後に報告書を提出してもらい、彼らの記述に現れた内容を Deardorff のいう異文化間能力構成要素に分類し、考察する。

1）文化的気づき

報告書に現れた記述の中で最も多かったのが「文化的気づき」に関するものであり、参加者10名中９名が言及している。これらの記述を分類すると三つに分けられる。一つは大学生・高校生の授業態度に関するものであり、それらのうちいくつかの記述を引用すると次のようになる。

- 驚いたことは、生徒のほとんどが授業に積極的に参加していたことです。
- 学生がとても積極的に授業に参加していることに驚きました。学生たちと先生が一緒に授業を作っていく雰囲気がありました。

現地の大学および高校での授業に参加し、学生・教員の授業に臨む態度を観察する得たことが新鮮な驚きとして受け止められていることが伺われる。

二つ目は、現地研修で出会った学生や国際交流団体員の日本文化に対する関心の高さに対する驚きである。

- わずかな期間しか勉強していないにもかかわらずフランス人学生は日本語を使えているし、日本の何が好き？と聞けばみんなそれぞれの思いを語ってくれるし（しかも日本語で)、マンガやアニメに関しては私以上に知っていて、本当に日本は愛されていた、しかもこれは日本語学科だからというものではなく、話を聞くと日本が好きだという人は多いらしい。
- フランス人に”日本のどういったところが好きなのか”と聞いたのだが､多くは漫画､ゲーム、音楽などの現代のサブカルチャーと言われる分野に該当するものが回答された。この質問には、日本という国がどのように外国から見られているかを映し出していると考えられ、大きな意味を持っていると思った。

現地での日本文化への関心の高さについて言及した参加者は、全員が現地学生の日本現代文化に関する知識の豊富さに驚いたと記述している。対話実践の様子を観察すると、現地学生は日本語学習のきっかけが子供の頃から親しんできたアニメやマンガであり、授業外でもインターネットはもちろん、国際交流団体が開催する文化イベントに参加したり、団体事務局で収集しているマンガのコレクションなどを通じて日本文化に接している。さらに、上級生クラスでは若者文化にとどまらず、日本の伝統文化に関する調査発表が行われていた。現地学生はこれらの自分の持っている知識を日本人学生に語ることが嬉しくもありまた誇らしくもある様子で、参加者はそれに驚きつつ、熱心に耳を傾けていた。参加者の記述にもあるように、日本の文化が海外の若者に支持され、愛されていることを直接に彼らの口から聞けたことは、参加者たちの自己尊重を高めることに寄与したものと思われる。

文化的気づきとして読み取ることのできた最後の一つは、現地学生や団体員の日本文化に関する豊富な知識から、自己の文化に対する認識を新たにするというものである。

- 私たち日本人でさえ知らない文化や伝統を説明してもらったときは感心しました。（中略）フランスでそれを知る機会を得たことは、複雑な気持ちにはなりますがとても良かったと思います。私たちももっと日本文化を大切にしていかなければと感じた瞬間でした。
- 今まで日本の中からしか日本を見ていなかったが、日本の外から日本を見て、またいつも日本の外から日本を見ている人たちの話を聞くことによって「日本の良さ」というものを再確認できた。これが今回の研修で一番の収穫だったのではないかと思う。フランスについて学ぶつもりで行ったのに、一番勉強になったのは日本のことであった。
- 外国人が日本について興味を抱くということは、自国との違いをいい意味でとらえていると思われる。日本人である私自身がもっと日本について勉強するべきであると感じた。

参加者の多くが、最初に引用した記述と同様のことを述べている。現地学生の関心の高さと学ぶ姿勢を尊敬し、そしてそれらについて自分たちが関心を払ってこなかったことに対する反省が見て取れる。さらに最後の引用では、比較文化的な視点から異文化理解へのメタ認識を持つに至ったことが伺われる。

2）好奇心・探究心

「文化的気づき」に次いで多いのは、「好奇心・探究心」に関するものである。

- 私には将来海外で働きたいという夢があります。そのために大学生のうちに様々な国を訪れて異文化体験をしたいと考えており、今回この研修に参加しました。
- 私がこの研修に参加した目的、それは海外で日本語を学習する外国人と交流し、日本語教師になるという夢をより明確にさせるということだった。加えて、日本語学習者に限らず、フランスの人々と実際にコミュニケーションをとることで、フランスとは一体どういった国なのかということを理解することも目的の一つだった。

日本の外に出るのはほとんどの参加者にとってこれが初めての体験であったため、それに関連して出発前の異文化体験に寄せる期待を記述したものが見られた一方、引用したように異文化への好奇心を卒業後の進路に結び付けて捉え、その準備段階として研修への参加を決めたという意見を持つ参加もあった。

3）社会言語学的気づき

今回の研修は、目標言語使用地域での生活を体験し、主に同年代の目標言語母語話者と友好的な環境で直接対話することによって異文化体験の足がかりとし、異文化を背景とする若者との交流のきっかけを提供することによって他者への関心を高めることが目的であった。またもう一つの重要な狙いは目標言語を教室内で学習するにとどまらず現地実践を行うことによって、口語表現を鍛えてほしいということでもあった。報告書の記述や対話実践の参与観察から、第一の目的は充分に果たされたと考えることができるが、第二の目的についてはあまり成果が見られなかった。目標言語の学習開始から１年未満の参加者がほとんどであったため、言語的知識や経験が不十分であったことは考えられるが、現地学生や団体会員が、文章としてまとまらなくても積極的に日本語を話そうとする姿勢に比

べて、研修参加者には目標言語を発話することに抵抗があるかのように見受けられた。参加学生の報告書には、国際交流団体会員との対話の中で「日本から留学して来る学生は、あまり目標言語を使おうとしない」と聞いたことを記述したものも見られた。参加者だけの問題ではないのかもしれないけれども、目標言語の口頭表現にもっと意識を向けるように研修中に指導し、また通常の外国語授業形態を見直し改善する努力が必要なのではないかと思われた。

目標言語に関する社会言語学的気づきは、このような理由から報告書の中には見いだすことはできなかったけれども、学習途中の日本語学習者に対する対話方法に発見があったとの記述が見られた。

- 相手に分かりやすいような日本語を使うことは自分が思っていた以上に難しかったです。例えば主語を抜かしてしまうと、相手に質問しているのか自分のことを話しているのかが分からなくて、上手く伝わらなかったことが何度かありました。

学習途中の日本語学習者に出会う機会は、日本の中にいてもこれからますます増えていくことが予想される。また、日本語教育学の分野でも、学習者に分かりやすくひいては日本語を母語とする子供やお年寄りにも分かりやすい日本語の研究が始まっている。参加者が日本語学習者との対話を通じてこのような知見を得たことは意味のあることと考える。

4）比較文化的視点

文化を関連づけて捉える視点はその萌芽ともいえる意見が見られた。

- こういった交流から国と文化の違いを見つけることの面白さを見いだすことができた。
- 授業の進め方はパワーポイントを使うなど日本と似ている点もありましたが、学生の授業に対する姿勢は日本と異なっていると感じました。日本では学生は受け身の姿勢で授業に参加することが多いけれども、フランスの学生はとても積極的に参加していました。

「文化に関する知識と理解」は学習目標文化の中に入り込まずとも文献に当たるなどすることで得ることのできるものである。しかし短期間に学習したものではステレオタイプに陥る懸念がある。日本で学習した知識を現地での生活を体験することによって再考察することができるような研修プログラムを組む必要性があると感じた。

5）共感

Dewey は『民主主義と教育』の中で、共感性とは「人びとが共通にもっているものに対する洗練された想像力」「人びとを不必要に分裂させるどんなものに対しても逆らう反抗」と述べている（注５）。研修参加者の報告書には、初めて直接対話した現地学生の中に言語的困難や背景とする文化の違いを超えて共通性を見いだしている表現が見いだされた。

- 雰囲気はわたしたちよりはるかに大人っぽいけど話してみるとやっぱり同年代なんだということを実感できた。

- フランス人との交流中、身振り・手振り、顔の表情で表現することや英語で言い換えたりと、自分の言いたいことを精一杯伝えようとすると、言葉は分からなくとも共有できたことがあった。

これらの意見は厳密には共感性と判断することはできないかもしれないが、同じ人間として文化を超えた連帯性へと今後育っていくことに期待したい。

6）他者尊重と寛容性

研修参加者10名のうち３名の学生の記述の中に、他者の意見を尊重し、その現れ方の多様性を受け入れる点への表現が見られた。

- 一連の出身地のやりとりの中で私が感じたことはこうである。一口に、フランス（またはフランス人）とは△△であると語ることはできないし、語る必要もない、ということだ。
- 月並みな表現だが、世の中にはさまざまな人がいて、彼ら彼女らの置かれた状況もまたさまざまなのである。だからこそ、お互いの立場が尊重されるべきだし、そうして尊重されたそれぞれの立場が違うということはとても面白いことだと私は思う。
- フランスの良いと感じた点を吸収して、また嫌だと感じた点も否定せず理解していきたいです。

曖昧さや不確かさなど、多様性を受け入れる寛容性が異文化間能力を身につけ、適応性や柔軟性を発展させていくために最も重要だと考える。今回の研修参加以前から抱いていた感慨であるかもしれないけれども（注）、初めての異文化体験を経ることによって経験によって裏付けられた意見として結実したものと考えたい。

7）目標言語学習への動機付け

Deardorff の異文化間能力を構成する要素の中にはあげられていないけれども、参加者の報告書の中に見いだされた表現として「文化的気付き」、特に現地で対話した学生の日本文化への関心の高さに関する記述と同様に、数多く言及されていたのが、言語学習への意欲であった。

- この興味や関心が日本語の上達に繋がっているんだなと感じました。
- 自分も興味をもって語学力の向上に努められれば彼らのように今以上に話せるようになれると思うことができました。
- 乏しい語力では相手との会話を理解しにくいと先に述べたが、語力が貧しくても会話を楽しむことはできると感じられた。それは、自分の言いたいことを試行錯誤して相手に伝えようと努力すること、つまりコミュニケーション能力がいかに大切であるか知ることができたのであった。

日本語母語話者と対話するチャンスを逃すまいとする現地学生の熱意は、観察していて

も研修参加者のそれを大きく上回っていた。参加者の報告には、現地学生の多くが対話の最中にメモを手放さず、新しく学習した表現を書き留めてすぐに使ってみる様子に刺激を受けたとの記述も見られる。また三番目に引用したように、単に刺激を受けるだけでなく相互理解への努力に対する発見があったとの意見もあり、研修で得られた成果を継続して育てていける学習環境を日本の大学の中に作り出す必要性を痛感させられた。

8）他者への愛着

異文化間能力の構成要素には数えらていないが、もう一つ参加者の報告書に繰り返し現れた表現があり、それは現地学生や国際交流団体の人々の厚意に触れて「嬉しかった」というものである。

- 皆さん日本のことが大好きで、興味を持ってくれていることがすごく嬉しかったです。
- これらのことをテレビやインターネットなどで知るのではなく実際にフランスでフランス人から聞くというのはとてもいい体験だったと思うし、何よりもすごくうれしかった。
- 駅でナントの方々が温かく迎えてくださったので気持ちが楽になり、楽しく研修を進めることができました。

国際交流団体会員はもちろん現地学生も、我々の到着を日本語母語話者との対話のチャンスとのみ捉えていたのではない。むしろ、遠い日本からわざわざ会いに来てくれた貴重な友人として手厚くもてなし、到着から出発までつねに我々と行動を共にしてくれた。その間、多くの人が日本に対する愛着を異口同音に語ったことが、参加者に相手と相手が背景として持つ文化に強い愛着を抱かせたものと思われる。三番目の引用にもあるように、温かい出迎えが未知の土地での学習体験の緊張を解きほぐし、学習効果を高めていることも見逃せない。日本文化に強い愛着を示す同年代かつ学生という社会的地位も同じ若者たちから温かく歓迎され、落ち着いた友好的な対話の時間を持つことができたことは、参加者に相手への友情と関心の扉を開かせることになったものと考えている。

6．おわりに：今後の展望として

これまで述べたように、今回の研修は、目標言語学習者に授業の中だけでは得ることの難しい目標言語母語話者との個別対話の時間を提供し、異文化間能力を獲得する上で基礎となる態度や理解を養成する目的で行い、それを実践する上で相手との友好的な対話環境づくりを最も重視した。友好的な環境づくりのために、現地大学および高校での日本語学習者を対話相手として選んだのであるが、異文化体験の第一歩としてはほぼ成功であったと考える。参加者は相手の中に生きる自己の文化を発見し、他者と対話する意思と他者を尊重し受け入れる寛容性を見いだすことができた。しかし、自己の発見については数多くの言及があったけれども、相手の文化や思想についての言及が見られなかったのは残念であった。

さらに、研修のもう一つの目的である目標言語の実践演習という側面からは、研修プログラムを大幅に見直さなければならないと痛感した。事前研修の時点からインターネット

などを使って現地学生とともに一つの課題を二カ国語で協同学習するプログラムに取り組ませることで、日本人学習者の外国語使用へのストレスを軽減しつつ方向付けていくことができるのではないかと考えている。

注と参考文献

1　Deardorff, D.K., "Identification and Assessment of Intercultural Competence as A Student Outcome of Internationalization", *Journal of Studies in International Education*, Vol.10, N.3, 2006
2　前掲書　p.256
3　前掲書　p.257
4　前掲書　p.254
5　デューイ Dewey, J.『民主主義と教育』＜上＞岩波文庫、1994年、p.43